

中米ハイチで34年間、医療支援などを続ける広島市立高女(現舟入高)卒業生の須藤昭子さん(88)が先月、支援者へのあいさつのため広島市を訪れた。カナダに本部を置く修道女会のシスターで医師。1

月のハイチ大地震では、長年整備した病院や現地の若者たちと進める農業支援が大きな痛手を受けた。再建への道は険しいが、須藤さんは希望を捨てていない。(編集委員・申信考)

ハイチはよみがえる

地震復興・自立に希望

ハイチ大地震の死者は推定約22万人。発生当時、須藤さんは3年ぶりに一時帰国して無事だった。4月になって所属するクリスト・ロア宣教修道女会の許可が下り、2週間だけハイチに戻った。

「重機がないから、がれきをのけられない。被災者の仮設住宅もない。行政機能もまひしています」

首都ポルト・プランスから西へ約40キロのレオガンにある国立結核療養所。1976年に須藤さんが初めてハイチを訪れて以来、所長を務めた同病院もがれきの下敷きで入院患者が亡くなり、水の汚染に悩まされていた。須藤さんは病院で働くハイチ人のシスターやスタッフを支援するた

医療支援34年 広島市女卒の須藤シスター



移動式テントで子どもを治療する日本の医療チーム。大地震からの復興は須藤さんの願いでもある。1月、ハイチ・レオガン(山本太郎さん撮影)

め、今月17日に日本を離れの家で暮らしていた。れ、カナダに寄った後、おじも医師でカトリック10月、再びハイチに入るの信者。カナダの宣教師たちが兵庫西宮市に結核の病院を開設する事業を手伝っていた。

一貫した生き方の原点は大阪女子高等医専(現関西医科大学)の学生時代

にある。市女を戦時下の病院を掃除する姿を見て44年に卒業後、大阪のお

驚いた。当時の日本で結核は一番恐れられた病気。彼女たちは貨物船に乗って日本に来て、病院の泥をガラスの破片でこすり取っていた。表情がとても明るかった。その姿に引かれ、クリスト・ロア宣教修道女会に入った。医専卒業後、その病院で医師として働く。その後、国内では結核の発病は減少。74年、カナダの

生き方自体尊敬

山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授(竹原市出身)の話。2003年から04年までエイズウイルス(HIV)の研究でハイチに滞在中、須藤さんと知り合い、交流が続いている。須藤さんは生

修道女会本部にフランス語の勉強に赴き、ハイチという国を知った。「貧しい国で大人の死亡原因のトップが肺結核。ここに行く」と思った。レオガンの国立結核療養所に赴任したが、病院らしい設備はほとんどない。井戸を掘り、カナダから中古のベッドと医療器具を運んだ。日本の援助も受けて病院らしくするの5年。その後、同じレオガンのハンセン病病院の院長も務めた。ハイチでは国民は山で木を切り炭を作って生活しているが、植林をしながら土砂崩れによって農地が荒れていく。須藤さんは2005年、2人のハイチ人を植林の勉強のため日本に派遣。ハンセン病病院の裏庭で苗木作りが始まり、植林を呼び掛けるラジオ放送も始

き方自体が尊敬できる人。私もハイチ大地震の直後、国際緊急援助隊医療チームの一員として現地に入った。国際支援はその国の住民に直接届くことをする必要がある。今後日本人がハイチを支援する場合は、須藤さんの意見をよく聞くことが望ましいと思う。

今回の広島訪問では中区のホテルで市女の同窓生や支援者たちと懇談。学校建設や病院の再建は何年かかるか分からない。須藤さんは「日本人たちが支援してくれるから頑張っている。ハイチの人々が自分たちで技術を覚え、自立できるように援助をしたい。あるものを工夫し、できることからやっていきたい」とほほ笑んだ。